

小子部スガル伝承における蚕神と雷神

荒川理恵

「キーワード ① 蚕神、② 雷神、③ 小子部スガル、④ 聖婚、⑤ 桑樹」

桑と雷、桑と水の深い関係については、石田英一郎をはじめとする、多くの先学が論じている。また、養蚕起源説話に関しては、伊藤清司氏が日本及び中国の伝承を比較分析し、伝播の観点から論じている。

筆者は先に他所で機会を得、天石屋戸神話を馬娘婚姻譚と比較する事により、アマテラスの神格に蚕神としての一面を見い出すことができるのではないかと分析した。^(注1) また別の所では、水神祭祀における馬の役割等を手掛かりとして、天斑馬とスサノヲの同一性について検討し、蚕神の夫としてのスサノヲの神格を考察した。^(注2) 本稿では、小子部巢嬴にまつわる諸伝承を中心に取り上げ、皇后と天皇の關係について分析し、そこにアマテラスとスサノヲとの間に認められたのと同様の、一つの神話的構造があることを探っていきたい。

1 スガルと蚕

小子部巢嬴は、蚕と雷神に関わる人物として広く知られている。

小子部巢嬴（以下、スガルと略す）は小子部雷ともいい、雄略天皇の側近とされている。『日本書紀』雄略天皇六年三月及び、七年七月条に彼にまつわる話が記載されている。また、六年三月条と同じ記事が『新撰姓氏錄』に、七年七月条の異伝が『日本靈異記』第一話に、十五年条の秦酒公の話との関連記事が『新撰姓氏錄』に見える。これら諸伝の中でスガルは、一見すると非常に奇妙なエピソードをもって天皇・皇后と関わり、神と交信する人物として描かれている。スガルは蚕と嬰兒を取り違えて集めてきたり、常人ならぬ膂力を買われて雷神を捕まえに行くなど、トリックスター的な活躍をしている。そこでこれらの説話も、諸先学により様々な角度から研究されてきた。

だが、このスガルなる人物が、蚕・子、あるいは雷神といったものと深く関わっているその積極的事由は、必ずしも明白ではない。しかし、卑見によれば、これらの説話についても、皇后の蚕神としての側面と、その夫である天皇の性格を分析し、両者の関係を考えることによって、一連の話がスガルに結び付けられている必然性も明らかにされると思われる。

『日本書紀』雄略天皇六年^(注3)

三月の辛巳の朔丁亥に、天皇、后妃をして親ら桑こかして、蠶の事を勧めむと欲す。爰に巢嬴巢嬴

は人の名なり。此をば須我殿と曰ふ。に命せて、國內の蠶を聚めしめたまふ。是に、巢嬴、誤りて嬰兒を聚めて、天皇に奉獻る。天皇、大きに咲きたまひて、嬰兒を巢嬴に賜いて曰はく、「汝、自ら養へ」とのたまふ。巢嬴、即ち嬰兒を宮牆の下に養す。依りて姓を賜ひて、少子部連とす。

天皇が養蚕を奨励するため、蚕を集めさせたところ、命を受けたスガルは蚕と子を取り違えて、嬰兒を集めてしまう。この奇妙な記事は、少子部という品部の起源譚や、スガルという人名の解釈など様々な角度から研究されている。だが、蚕と子の取り違い≡混同という問題については、従来は單純に同音の語であるという理由に帰されてきた。しかし筆者は、スガルがここで行っている一種トリックスター的な取り違えにこそ、重要な神話の意味が隠されていると考える。そこで、以下にスガルにまつわる異伝を通じて、この点についての考察を進めていきたい。

この記事で、天皇が下した命令である「蠶の事」について、日本古典文学大系本の頭注は、以下のような解説を加えている。

礼記、月令に『季春之月、后妃斉戒、親東向_レ桑、以勸_二蚕事_一』とあり、古代中国の後妃が三月に行った農事関係祭祀。クハコクは桑の葉を摘みとる意。漢書に元后伝に『率_二皇后列侯夫人_一桑』とある。古訓クハコカシメテのコカスは、扱かす意。稲を扱くのコクと同じ。

「クハコク」が桑の葉を摘みとる意であることは確かであろう。そしてここに、石田英一郎が中国の採桑伝説に関して行った、桑摘みと性交との関連についての論考を参照して考えることで、桑扱き蚕の事を勧めるということの、もう一つの深い意味を汲み取ることができよう。^(注4)

男子が路傍に桑葉を採る女子を見て、その色を愛で、これに挑む筋の物語が多い。しかもこれらの物語の古く分布した河南、山東、河北一帯の地は、本来桑土の野で、ことに河南は、『詩経』庸風の「桑中」や礼の樂記にいわゆる「桑間濮上之音」を産んだ地方である。桑中の喜といい、桑濮の音という、みな、いずれも男女の情事に関連するもの、（中略）採桑伝説とともに、これらと根底において相通ずる思想に由来するものであらう。

このように論じた上で石田は、「蚕事に関するおごそかな宮廷后妃の祭儀」、「あるいはこの種の儀礼そのものも、窮桑、台桑、空桑などの諸伝説とともに、古くさかのぼれば（あるいは水辺の）桑樹の下に神とまぐわいする神妻というような類の根本觀念に導かれていたものではあるまいかとさえ想像されてくるのである。」と述べている。

この石田の論考は、儀礼主義的解釈が濃厚なものであり、全面的な賛成はできない。しかし、「桑扱く」行為自体、性交の含意・寓意を有するものであるという指摘は重要である。そしてこの観点からすれば、スガルの蚕と嬰兒との混同は、養蚕自体に含まれる性交の含意に導かれて起きた間違いであり、後述する『日本霊異記』第一話における、天皇・皇后の同衾の話にも同質の寓意が見出されると考えられる。さらにそこには、蚕神と皇后などの尊い女性を同一視する思想も窺えるのである。

スガルが蚕と嬰兒とを混同したというこの事件について、『新撰姓氏録』^(注)左京皇別の記事では、次のように伝えられている。

小子部宿禰。多朝臣と引き祖。神八井耳の後なり。大泊瀬幼武天皇の御世、諸国に遣はされ、蚕児を取り

斂むべきを、誤りて小兒を聚めて貢る。天皇、大きに晒ひて、姓を小兒部連と賜ふ。

2 天皇と養蚕

ところで、『新撰姓氏録』山城国諸蕃の秦忌寸の条には、雄略天皇が小子部雷に次のような命を下したとする記事がある。

天皇、使 小子部雷を遣はし、大隅、阿多隼人等を率て、搜括鳩集めしめたまひ、秦民九十二部、一万八千六百七十人を得て、遂に酒に賜ふ。爰に、秦民を率いて、蚕を養ひ絹を織り、匪に盛り、闕に詣でて貢進りしに、岳の如く、朝廷に積蓄む。天皇、嘉ばせたまひて、特に寵命を降したまひ、号を賜ひて禹都萬佐と曰ふ。

ここではスガルは、養蚕や機織りを専門の職能とする集団である秦氏を取り纏め、雄略天皇紀での失敗を取り戻すかのように、自らに課せられた大役を果たしている。さらに興味深いことには、この秦氏は、後に分析する皇極天皇紀の記事において「常世虫」騒動を鎮圧した、秦河勝を出している氏族でもある。

さて、スガルに相当する人物は見えないものの、これと同様の記事は、『日本書紀』雄略天皇十五年にもある。そこでは、秦氏による養蚕振興の成功が語られ、雄略天皇は殊更に養蚕に熱心な人物として描かれている。十五年に、秦の民を臣連等に分散ちて、各欲の随に駈使らしむ。秦造に委にしめず。是に由りて、秦造酒、甚に以て憂として、天皇に仕へまつる。天皇、愛び寵みたまふ。詔して秦の民を聚りて、秦酒公に賜ふ。公、

仍りて百八十種勝を領率ゐて、庸調の絹縑を奉獻りて、朝廷に充積む。因りて姓を賜ひて禹豆麻佐と曰ふ。一に云はく、禹豆母利麻佐といへるは、皆盈て積める貌なり。

十六年の秋七月に、詔して、桑に宜き國縣にして桑を殖ゑしむ。又秦の民を散ちて遷して、庸調を獻らしむ。

また、『古事記』において仁徳天皇は、他の妃に嫉妬して出奔した皇后・石之比売を迎えに韓人の奴理能美の家に行き、『三色に変わる虫』蚕を献上されている。

さらに、継体天皇元年の記事として、『日本書紀』は以下のような詔を載せている。

『日本書紀』 繼體天皇 元年三月

戊辰に、詔して曰はく、「朕聞く、をこととし士年に當りて耕らざること有るときには、天下其の飢を受くること或り。女年に當りて續まざること有るときには、天下其の寒を受くること或り。故、帝王おほみみずか躬ら耕りて、農業を勧め、后妃親ら蠶して、桑序を勉めたまふ。況や厥の百寮、萬族に暨るまでに、農績を廃棄てて、殷富に至らむや。有司、天下に普告ひて、朕が懷はむことを識らしめよ」とのたまふ。

継体天皇は、即位後最初の詔で、手白香皇女を皇后に迎え後宮に関することを修めさせることを決定し、後の欽明天皇を儲けたと『紀』にある。それに続く二番目の詔がこの記事である。即ち天皇は第一に皇統の存続を確保し、次に農業と機織りについて天皇と皇后がそのそれぞれの範を示し、男女それぞれに振り分けて奨励することで、天下國家の安寧を図ると宣言したのである。このように徳に優れた天皇とされる人物は、必ずと言ってよい程「蚕」の事に熱心であったとされている。

3 天皇皇后の同衾と斎戒

ここでお注目すべき説話として、『日本靈異記^(注6)』にある「雷を捉ふる縁」が挙げられる。

小子部栖輕は、泊瀬の朝倉の宮に二十三年天の下治めたまひし雄略天皇〔大泊瀬稚武の天皇と謂す〕の隨身、肺脯の侍者なり。天皇、磐余の宮に住みたまひし時、天皇、后と大安殿に寝つ婚合したまへる時に、栖輕知らずして参る入りき。天皇恥ぢて輟ミス。時に當りて空に雷鳴る。即ち天皇、栖輕に勅して詔はく「汝、鳴雷を請け奉らむや」とのたまふ。答えて曰さく「請けたてまつら将」とまをす。天皇詔曰はく「爾あらば汝請け奉れ」とのたまふ。栖輕勅を奉り宮より罷り出て、緋の褌を額に著け、赤き幡杵を捧げて、馬に乗り、阿部の山田の前の道と豊浦寺の前の路とより走り往きて、輕の諸越の衢に至り、叫囂び請けて言はく「天の鳴雷神、天皇請け呼び奉る云々」といふ。然して此より馬を還して走りて言はく「雷神と雖も、何の故にか天皇の請けを聞かならむ」といふ。走り罷る時に、豊浦寺と飯岡との間に鳴神落ちて在り。栖輕見て即ち神司を呼び、輿籠に入れて大宮に持ち向かひ、天皇に奏して言さく「雷神を請け奉り」とまをす。時に雷光を放ち明り炫ケリ。天皇見て恐り、偉シク幣帛を進り、落ちし處に還さ令めしかば、今に雷の岡と呼ぶ。古京の小治田の宮の北に在り。然して後時に栖輕卒せにき。天皇勅して留むること、七日七夜、彼の忠信を詠ひ、雷の落ちし同じ處に彼の墓を作りたまひ、永く碑文の柱を立てて言はく「雷を取りし栖輕が墓」といふ。此の雷惡み怨みて鳴り落ち、碑文の柱を踊エ踐み、彼の柱の析けし間に雷櫟リテ捕へらる。天皇聞きて雷を放

ちしに死な不。雷慌レテ七日七夜留まりて在り。天皇の勅使、碑文の柱を樹てて言はく「生きても死にても雷を捕へし栖軽が墓」といふ。所謂古京の時に名づけて雷の岡と為ふ、語の本是れなり。

この所伝では、スガルの武勇伝が同時に雷の岡の地名由来譚ともなっている。そのため、『日本書紀』雄略天皇七年の秋七月の条の「依りて改めて名を賜ひて雷とす」という記述も、スガルの改名の話ではなく、本来、雷の岡の地名由来譚であると解釈する説がある。

いずれにせよ奇妙なことは、天皇の分身ともとれる重要な家来であるスガルが、天皇と皇后が同衾している場に踏み込んだとされていることである。しかも、同衾が行われていたのは、そのような場所としては全く不適当な、政務を執り、即位・年賀・新嘗といった大礼の儀式を行う場である大安殿（大極殿）である。このような不自然な事が何故語られるのであろうか。

『日本書紀』雄略天皇七年の秋七月の条を見ると、

七年の秋七月の甲戌の朔 丙子に、天皇、少子部連巢贏に詔して曰はく、「朕、三諸岳の神の形を見むと欲ふ。或いは云はく、此の山の神をば大物主神と為ふといふ。或いは云はく、菟田の墨坂神なりといふ。汝、膂力人に過ぎたり。自ら行きて捉へて来」とのたまふ。巢贏、答へて曰さく、「試に往りて捉へむ」とまうす。乃ち三諸岳に登り、大蛇を捉取へて、天皇に示せ奉る。天皇、斎戒したまはず。其の雷かみひかりひらぬ懸まなごれあやきて、目精まなごれあや赫赫まなごれあやく。天皇、畏みたまひて、目を蔽ひて見たまはずして、殿中に却入れたまひぬ。岳に放たしめたまふ。仍りて改めて名を賜ひて雷とす。

ここで天皇が見たいと言ったとされている三諸岳の神とは、大物主神もしくは菟田の墨坂神であるという。

墨坂神とは大系の頭注によれば大和国宇陀郡宇太水分神社であり、即ち、風雨・水を司る神である。また、実際にスガルが捉えたのは大蛇の姿をした雷神であったとされる。

天皇は雷神を連れてくるよう自分で命令を下しておきながら、実際に雷神と対峙すると「天皇見て恐り」「偉シク幣帛を進り、落ちし處に還さ令め」ざるを得なかったとされている。その原因は、単に恐怖によるものではなかったであろう。この記事によれば、天皇自身が齋戒していなかったためと考えられるのである。

齋戒とは、ある期間、血や死の穢れにも、また女性にも触れず、身を清めて生活することである。しかしスガルが雷を捕まえてきて天皇に指し示したときには、「天皇齋戒したまはず」とあり、明確に因果関係として述べられてはいないが、その後すぐに「其の雷魑^(注8)きて、目精赫赫く。天皇、畏^(注7)たまひて、目を蔽ひて見たまはずして、殿中に却入れたまひぬ」とあるのだから、天皇自身が齋戒していなかったことが、雷神を荒ぶらせしめた原因であろう。そして、「齋戒したまはず」とは、そう明言はされていないが、女性との同衾を含意していると考えられるのではないだろうか。

ここでもう一度天皇と皇后の同衾という事について考えてみると、先の『日本霊異記』のスガルの話と比較できる記事として、『古事談』^(注8)にある源融の霊の怪異の話「宇多法皇、源融ノ霊ニ御腰ヲ抱カレ給フ事(巻一ノ七)」が挙げられよう。

寛平法皇、京極の御息所と同車して、川原院に渡御す。山河の形勢を歴覧して、夜に入りて月明かし。御車の畳を取り下げしめ、仮に御座と為し、御息所と房内を行はるるあひだ、塗籠の戸を開きて出づる声あり。法皇問はせ給ふ。対へて云はく、「融に候ふ。御息所を賜はらんと欲す」と。法皇答へて云はく、「汝は在

生の時、臣下たり。われは天子たり。何ぞ漫りにこの言を出だすや。早く退帰すべし。」といへり。靈物忽ちに法皇の御腰を抱く。半死にておわします。前駆等みな中門の外に候ふ。御声及達すべからず。牛童頗る近くに侍りて、御牛に食はしむ。件の童を召して、人々を御車に差し寄せしめ、御息所を乗せしめたり。顔色色無く、起立することあたわず。扶けて抱き乗せしめ還御の後、淨藏大法師を召して加持せしむ。纔かに蘇生すと云々。法皇、前世の行業により日本の王となれり。宝位を避くといへども、神祇守護し奉り、融の靈を追ひ退くるなり。件の戸の面に打物の跡あり。守護神退き入らしめて覆ふなりと云々。

源融は、嵯峨天皇を父として生まれ、従一位、左大臣に任ぜられ、没時まで二十年以上在任して長く権勢を誇った人物で、河原左大臣と称された。この話の舞台となっている川原院は、融の屋敷跡であり、そこに彼能の『融』の潮汲みで有名な、奥州の塩竈の景観を模した豪奢な庭園を構えていた。

一方の寛平法皇とは、第59代宇多天皇のことで、光孝天皇の第七皇子である。十年間の在位後出家し、亭子院とも号した。

この話では、川原院を訪れた寛平法皇と御息所が御寝所で同衾した所へ、屋敷の元の主である源融の靈があらわれ、御息所に横恋慕する。それに対し法皇は、「汝は在生の時、臣下たり。われは天子たり。何ぞ漫りにこの言を出だすや。早く退帰すべし。」と言って融の靈を追ひ払う。御息所も、はじめは意識を失っていたものの、法師の祈禱によって回復する。そして、「宝位を避くといへども、神祇守護し奉り、融の靈を追ひ退くるなり。」「守護神退き入らしめて覆ふなりと云々。」とされているのである。

『古事談』では、この融の靈の話の前段に、生前の融が臣籍に下っている身分でありながら帝位に就こうな

どという思い上がった発言をし、周囲にたしなめられたという逸話が載せられている。この記述の存在からしても、この話は臣下になった人物の皇后（この場合は御息所）への単なる横怨慕の話ではない。天皇・皇后の同衾という神的関係を破ろうとする怨霊によってもたらされた危機的状況と、神的加護をうけた神聖な王のそれに対する勝利の話と解釈できるのである。

4 馬の怪異・蚕の怪異

ここでもう一度、天皇の神性の側面である風雨（雷）神性と馬との同質性について考え、それとともに、皇后の蚕神性について検討してみたい。

前述のように、筆者は既に他所において、天の斑馬とスサノヲの同質性について分析し、天皇に馬的性格が付与されている可能性を考察した。その論の傍証となる要素を含むものとして、中国の『搜神記』^{（注9）}に見られる次のような説話を取り上げることができるだろう。

「馬の怪異」

秦の孝公二十一年、馬が人を生んだ。昭王二十年、牡馬が子を生んで死んだ。劉向は、いずれも馬の禍だと見ている。『京房易伝』に言う。

「諸侯が割拠して威力を競えば、牡馬が子を生むという異変を生じ、天子をないがしろにして、諸侯が戦争しあえば、馬が人を生むという異変を生ずる」

「馬に角が生えれば」

漢の文帝十二年（前一六八年）、呉の地方で馬に角が生えた。角は耳の前方に上向きに生え、右の角は長さ三寸、左の角は長さ二寸、どちらも直径は二寸であった。劉向の意見では、馬に角が生えるわけではない。それは呉が兵を挙げてお上に刃向かうはずがないのと同様だが、この異変があらわれたのは、呉が反乱を起こそうとしている前兆だとのことであった。『京房易伝』に言う。

臣が君主を侮り、政治が秩序正しくおこなわれないと、馬に角を生ずるという異変がある。つまり立派な人材が不足しているわけである」

また言う。

「天子がみずから賊を討伐すれば、馬に角が生ずる」

「呉が反乱を」というのは、呉楚七国の乱のことで、景帝三年（前一五四年）、漢室の一族である呉楚など七国の諸侯が反乱を起こしたが、まもなく平定されたことをいう。

以上二つの説話は、天子の徳の軽重と馬に起こった異常現象との間に、因果関係があると説明しているわけだが、こういった神話的観点から考えて興味深く思われる記事が『日本書紀』皇極天皇紀に見出される。

皇極天皇は在位期間四年の女帝であるが、同時に蘇我氏の専横を許し、政治的にも混乱の時代をもたらした事が知られている。蘇我入鹿による山背大兄王の弑逆という大事件はもとより、季節にそぐわない政を行った為に異常気象が起きたり、巫覡が多く輩出する等、その治世は政情も風俗も不安定なものであり、こうした中で起きた常世神の騒動は、象徴的な事件として捉えられるであろう。

皇極天皇三年七月の条に、「東国の不尽河の辺の人大生部多、虫祭ることを村里の人に勧めて曰はく。『此は常世の神なり、此の神を祭る者は、富と寿を到す』といふ」とあり、この虫は「養蚕」に似ていたが、人々がこの「常世の虫をとりて、清座に置きて、歌ひ舞ひて、福を求めて珍財を捨」てるので、「葛野の秦造河勝、民の惑はさるるを悪みて大生部多を打つ」とある。

この蚕に似た虫は、緑色で黒い斑点を持ち、橘か山椒につく虫とあるので、アゲハ蝶の幼虫かとも思われるが、この虫を崇め祭るといふ奇妙な宗教が流行した時代は、蘇我氏の専横によって、王権自体が危機的な状態にあったと考えられる。また実際、蘇我氏が倒れるやいなや、天皇は位を追われている。

この事件の首謀者とも言うべき人物、大生部多を征伐した秦造河勝は、前述したように養蚕を束ねる秦氏の総帥である。これらのことから考えると、皇極天皇は女帝としての神性を欠いた、いわば出来損ないの蚕神であるため、常世の虫などという奇怪しい宗教が発生・流行したのであると考えられる。

5 風雨神・雷神としての天皇

ここまで、皇后（女帝）に蚕神的性格、天皇に神馬的性格があることを検証してきた。こうしてみると、スガルが「馬を還して走り」ながら「雷神と雖も、何の故にか天皇の請けを聞か不らむ」と叫んで雷神を捕らえたことにも、天皇の神馬的性格が反映され、風雨・雷をも従わせる存在であるという思想が窺われるのではないだろうか。

徳に優れた天皇は、風雨をも意のままに操れる存在であると考えられていた事は、『古事談』の「醍醐天皇臨時ノ奉幣ノ日、風ヲ止メ給フ事（巻一ノ八）」という記事からも明らかになるだろう。

延喜の聖主、臨時の奉幣の日、南殿に出御す。もとより風あり。笏を把り靴を着きて拝せんと欲するあひだ、風弥弥猛く、御屏風殆ど顛倒すべし。仰せられて云はく、「あな見苦しの風や。神を拝し奉る時に何ぞこの風あるや」と云々。即刻風氣俄かに止むと云々。

ここで想起されるのは、『搜神記』にある、「武王の威光」の記事である。

武王が紂王を討伐しようとして黄河のほとりまで来ると、雨がひどく降り、烈しい雷鳴をともなつて、あたりはまっくらになり、黄河には荒波がたけり狂った。家来たちは恐れおののいたが、武王が、「天下に我あり。指一本触れても見よ」と言うと、風も波もびたりと静まったのであった。

武王とは周王朝の始祖であり、殷の紂王を討つて天下を平定した霸王である。このように、王者のなかでも特に優れた者は、日本でも中国でも風雨を意のままに扱う力を持つと考えられていた。

また、天皇の命を受けた代理としての臣下も同様な能力を持ち、たとえ雷神と対決することになつても、揺るぎない力が発揮できるのだと思われる。そのことを示す話が『日本書記』推古天皇二十六年にある。

是年、河邊臣、名を闕せり。を安藝国に遣して、舶を造らしむ。山に至りて舶の材をまぐ。たぐらむ便に好き材を得て、伐らむとす。時に人有りて曰く、「霹靂ひびとぎの木なり。伐るべからず」といふ。河邊臣曰はく、「其れ雷の神なりと雖も、豈皇の命に逆はむや」といひて、多く幣帛を祭りて、人夫を遣りて伐らしむ。則ち大雨ふりて、雷電す。爰に河邊臣、剣を案りて曰はく、「雷の神、人夫を犯すこと無。当に我が身を傷らむ」とい

ひて、仰ぎて待つ。十餘霹靂すと雖も、河邊臣を犯すことを得ず。即ち少き魚と化りて、樹の枝に挟れり。即ち魚を取りて焚く。遂に其の舶を修理りつ。

推古天皇の命令で、ツムル大船を造るため雷の依り代とみられる木を切ろうとしたところ、雷神は抵抗するが、結局木の枝に挟まって退治される。この「霹靂の木」が何の木であるかは不明であるが、スガルの墓の碑文の柱に雷が挟まったり、多くの雷が桑の木の裂け目に挟まって捕まるのによく符合する。

また、神田に水を引くために、雷神自身を操り使って岩を砕かせる話が『日本書紀』神功皇后 摂政前紀（仲哀天皇九年四月）にある。

既にして皇后、即ち神の教の驗有ることを識しめして、更に神祇を祭り祀りて、躬ら西を征ちたまはむと欲す。爰に神田を定めて佃る。時に雛の河の水を引せて、神田に潤けむと欲して、溝を掘る。迹驚岡に及るに、大磐塞りて、溝を穿すること得ず。皇后、武内宿禰を召して、劍鏡を捧げて神祀を禱祈りまさしめて、溝を通さむことを求む。則ち當時に、雷電霹靂して、其の磐を蹴み裂きて、水を通さしむ。故、時人、其の溝を號けて裂田溝と曰ふ。

この場合、神功皇后は皇后ではあるが、既に応神天皇を身籠っており、また、神に対して不敬であった仲哀天皇に代わって、女性ながらも神意を受け西征を行う人物であるので、天皇に同定され得るだろう。

またもう一度『搜神記』に立ち返って見ると、「湯王の雨乞い」の話に、風雨（雷）神・水神としての王の性格が見出される。

商の湯王が夏を減ぼしたのち、七年間も大ひでりが続き、洛川は涸れてしまった。そこで湯王は桑林まで

出かけて神を祀り、爪と髪を切り、みずからを犠牲として捧げる心で上帝に祈願した。すると、たちまちのうちに大雨が降り、国じゅうがうるおったのであった。

この「湯王の雨乞い」では、王自らが犠牲となるつもりで、雨乞いをし、見事に雨を降らせている。湯王は殷の初代の帝であり、夏の桀王を滅ぼして殷朝を開き、仁君とうたわれたとされる伝説上の人物である。爪と髪を切り、みずからを犠牲として捧げる心で上帝に祈願し、雨が降ったという話は、日本神話のスサノヲの神話を彷彿とさせる。

スサノヲは、アマテラスの石屋戸籠もりという天変地異を引き起こす。爪と髪を抜かれ千位置戸を負わされて高天原から追放され天降る時に、大雨が降ったとされているからである。そして、このスサノヲは既に拙論でも論じたように、天石屋戸神話では、アマテラスの夫としての役割を果たしており、周知のように風・雨・雷などに関係の深い神である。

さて、このような行動をした湯王は、桑林で祈りを捧げている。石田英一郎は（スサノヲとの比較といった観点で論じているのではないが）、湯王が桑林に雨を祈ったことを、「桑と雷との関係と共に、桑樹の霊能の水界となんらかの関係あるやを思わしめずにはおかない。」といみじくも評している。そしてこの説話について、「殷の社桑林に男女相会しておこなったような、太古の性的な祭儀のほのかな記憶」にその起源が求められるとしている。^(註4)この論に全面的には賛成できないが、石田が指摘したような、桑樹と水界の関係も一考を要するだろう。ともあれ、少なくとも神聖を王が風雨神の要素を持つことは明らかであると思われる。このように、男神や神聖な王に風雨神的な性格が共通して見られ、馬が風雨神・水神と深い関わりを持つという事も、

天石屋戸神話が馬娘婚姻譚の系譜に連なるものであろうという推測を補強するものとなるだろう。

馬と風雨神・水神の関係については多くの先行研究もあり、筆者自身も既に他所においても考察してきた。しかしなお注目すべきは、馬娘婚姻譚で馬の皮は必ずと言っていい程多くの場合、黒雲を伴う一陣の風に巻き上げられ、娘を包んで飛んで去るという点である。『日本霊異記』で天皇と皇后が同衾していた時も、雷鳴が轟き、天候が荒れていたとされている。

また、スガルが馬に乗って雷を捕らえにいったことにも表れている様に、馬の持つ神話的イメージと女神・皇后が蚕の化身としての性格を持つことを連関させて考えると、天皇と皇后の関係には、風雨神が化身した馬と蚕神との婚姻の要素が認められる。そしてそのような神話的な意味は、かなり後代の天皇、皇后の関係にまで受け継がれていると思われるのである。

こうした観点から考えると、天皇と皇后の関係には、それぞれ「皇后・女神Ⅱ蚕神」と「天皇・男神Ⅱ馬Ⅱ風雨神・雷神」とでもいうべき要素が有り、両者は桑樹を媒介として結びつけられているものであるという、神話的発想が説話に反映されていると思われる。

以上、小子部スガルの伝承を中心として、皇后・天皇の関係に、アマテラス・スサノヲの間に見られたのと同様、蚕神と風雨〔雷〕神・水神の関係が見られることを検証してきた。またそれによって、スガルに結びつけられた一連の奇妙な説話も、共通の神話的発想を基礎として、有機的に結合していることが窺い得たと思われる。

最後に、スガル自身に付与されている性格の神話的性格に少し触れるとすると、スガルの特性はそのトリッ

クスター性にあると言える。トリックスターとは、策略を巡らし、悪戯を仕掛け、既成の秩序を一時的に破壊するという役割を担う人物・神である。しかし秩序を破壊するからといって悪者ではなく、その存在はむしろ、沈滞した秩序を破壊することにより混沌（カオス）を持ち込み、より活性化した秩序に向けて挑発する役割を果たしている。

スガルが犯した、蚕と嬰兒との混同という間違いは、本来別のものとして区別されるべき蚕と嬰兒を、彼が同じものと認識している事を示している。天皇・皇后が「桑扱」き、即ち同衾すれば、生まれてくるのは嬰兒であり、蚕でないのは当然である。だが、トリックスター的な存在のスガルは、皇后が本質的な面の一つとして蚕神性を有することを、彼独自の洞察力で見抜いているのであろう。そして蚕と子の同質性に引きずられたために、蚕Ⅱ子という混同が生じ、嬰兒を連れてきてしまったのだと考えられる。

また、『日本霊異記』のスガルが大安殿での同衾の場に踏み込んでしまうのも、養蚕という公務と聖婚に対するトリックスターならではの混同の頭れと考えられよう。いずれにせよ、スガルの犯した間違いが、新たに明確な文化的区分・秩序を発生させる原動力となるのである。

さらに、混同という言葉の意味からすれば、源融が犯した間違いも、天皇と臣下の者の間に本来在る筈の、厳然たる区別を冒瀆するような間違いであった。融は、生前は臣下に下った身でありながら帝位を望み、死後は法皇の妃である御息所を奪おうとしている。スガルは天皇の分身ともとれる大事な従者であり、いわば身代わりともなれる存在であった。それに対し、融は嵯峨天皇の皇子で、長く左大臣を努めた最高権力者であり、天皇に成り代わろうとする野心を持った存在であるという点も興味深い。両者とも、こうした人物であるとき

れていたからこそ、天皇・皇后の同衾の場にも踏み込めたのであろう。

スガルの諸伝について、この様なトリックスター性という側面からのアプローチを深める余地は未だ残されているように思われる。また、桑樹及び蚕室に関する民間伝承、蚕と馬に関する俗信、雷の禁忌、『日本霊異記』の道場法師の誕生因果譚等にも、ここで述べてきたような神話的思考の反映を探っていくことができるであろう。今回はそれらについては論じることができなかったが、以後の課題として研究を続け、機会を改めて発表したい。

注及び引用文献

注1「古事記における養蚕起源神話―馬と蚕をめぐる―」『学習院大学上代文学研究会 第19号』

付記：拙論発表後、『日本昔話通観 第7巻 福島』に見た、馬娘娘姻譚型の蚕の起源説話は、次のようなものである。

No. 654 蚕の起り―姉と弟型

「姉と乱暴な弟があり、姉が機を織っているところに弟が馬の皮をはいで投げつける。姉は馬の皮にくるまれ、風で桑の木の高いところに吹き上げられ、その体から細かなうじが出て、桑の葉を食べてまゆを作る。それが蚕のもので、首のところに馬の足あとが付いている。」（会津館岩）

この話では、主人公を姉と弟にしており、まさにアマテラスとスサノヲに同定すべき話型をとっており興味深い。

注2「天斑馬とスサノヲ」『学習院大学国語国文学会誌 第39号』

注3「『日本書紀』の引用は、以下全て、坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋校注岩波書店 日本古典文学大系に拠る。

注4―石田英一郎「桑原考―養蚕をめぐる文化伝播史の一節―」『桃太郎の母』講談社学術文庫

注5―『新撰姓氏録』の読み下し文は佐伯有清『新撰姓氏録の研究』本文編・考證篇 吉川弘文館に拠った。

注6—『日本霊異記』岩波書店 日本古典文学大系

注7—天皇の齋戒とともに皇后のあり方も考慮すべきであらう。この点に関しては、現段階では詳しく考えてはいないが、次の一文も参照することができる。『淮南子』時則訓（劉安編 戸川芳郎他訳 平凡社中国古典文学大系）に「后妃は齋戒して、車に向きつつみずから葵をつみ、婦人の使役を減じて、養蚕を勉める。」とある。

注8—源頭兼撰 小林保治校注『古事談 上』現代思潮社

注9—干宝 竹田晃訳『搜神記』平凡社東洋文庫

THE GODDESS OF SILKWORM AND THE GOD OF THUNDERBOLT IN THE LEGENDS OF “SUGARU”

Rie Arakawa

There are various legends of “SUGARU” in “NIHON-SHOKI”, “NIHON-RYOIKI”, and “SHINSEN-SHOJIROKU”. In these legends, “SUGARU” is related to the empress and the emperor, or to silkworms and thunderbolts, at first sight, with such strange episodes as gathering babies instead of silkworms, or capturing the got of thunderbolt.

Although there are already some studies about “SUGARU”, we have as yet no clear explanation about the relationship between “SUGARU” and those strange episodes.

This paper examines the relationship between the empress and the emperor in comparison with the legends of “SUGARU”.

They are based mainly on two ideas; the identification of the empress with the goddess of silkworm (on the one hand), and the assimilation of the emperor to the deity of storm and thunderbolt (on the other hand).

The sexual union of the empress and the emperor means (mythologically speaking) that of the goddess of

silkworm and the god of thunderbolt as we find in the myth of “AMATERASU” and “SUSANOWO”.

In conclusion, there is a similarity of the mythical structure of the relationship between the empress and the emperor (on the one hand) and that between “AMATERASU” and “SUSANOWO” (on the other hand).

(博士後期課程)

「小子部スガル伝承における蚕神と雷神」

荒川 理恵

小子部スガルに関する伝承は、『日本書紀』『日本書紀』『新撰姓氏録』にある。それらの記事の中で彼は、蚕と螟蛉を混同して集めたり、雷神を捕まえるなど、一見非常に奇妙なエピソード「逸話」を持って、天皇・皇后と関わり、同時に蚕と雷神に関わっている。

従来は、それらの話がスガルに関係付けられている理由は十分に明らかにされていなかった。本稿ではスガルにまつわる諸伝を中心として、皇后と天皇の関係を分析した。私見によれば、諸伝の根底には蚕神と皇后を同一視する思想があり、天皇は風雨神・雷神としての一面を持つという思想があると思われる。

この点から考えると、皇后・天皇にまつわる色々な説話のなかに、天石屋戸神話のアマテラスとスサノヲの関係と同様に、蚕神と雷神の聖婚の要素が認められた。その結果、皇后・天皇の関係には、アマテラスとスサノヲの関係と同様の神話的構造が存在することが分かった。